

鶴山書院報

公益財団法人孔子の里会報
「鶴山書院報」発刊に寄せて

聖廟創建の志を未来につなぐ



理事長 横尾 俊彦

ここ多久では三百有余年前の元禄十二年（二六九九年）に「学問所」ができました。邑主・多久茂文公が設けた学校です。一七〇〇年に「学寮」、一七一八年から「東原庠舎」となります。椎原山（＝鶴山）の傍らにあるので「鶴山書院」とも称されました。

その学制は当時としては珍しく、武士の子弟のみならず百姓・町人の子でも志ある者に門戸を開放しました。

多久の教育の原点でもあります。

そして、宝永五年（一七〇八年）に孔子廟（恭安殿）が創建されました。多久聖廟です。建築用材は邑内各所から集められ、多くの人々の貢献がありました。聖廟には「学田」がありました。収穫で学校運営を賄う仕組みです。これは備前・閉谷学校も同じで、藩が財政破綻しても学校は自治力を備え持続可能にするという領主の卓見です。

廟舎を見れば「敬」の心が湧き、向学心が高まり、謙虚に学ぶようになる。そんな茂文公の

願いや思いは『文廟記』に記され、聖域を意味する朱の壯観と、龍・麒麟・鳳凰・饗饗などの聖廟の意匠デザインに見ることが出来ます。孔子像は、当時、伊藤仁斎と並び称された京都の儒学者・中村惕斎の監修です。

貞享三年（一六八六年）に第四代多久邑主となった茂文公は若い頃より学問を好み、儒学者・武富成亮、佐賀藩の儒臣・実松元林に学びます。武富成亮は聖廟創建に相談役として関わり、かつて中村惕斎にも学んでいました。その縁が惕斎と繋げます。（多久聖廟孔子像と同じ鑄型で造られた閉谷学校の孔子像はいわば兄弟です。）

多久聖廟は大正十年（一九二一年）に国の史跡に、昭和八年（一九三三年）に国宝に指定されています。その後、法改正で昭和二十五年（一九五〇年）に国の重要文化財になりました。

公益財団法人孔子の里は、多久聖廟の祭典ほかを司るなどの役割を担う活動を展開してきました。平成二年に財団法人として設立され、平成二十五年に公益財団法人となりました。その原点である「鶴山書院」「東原庠舎」の志に立ち、新たな未来に向かうべく会報を発行する運びとなりました。多くの皆様に多久聖廟とその歴史や学び、文教都市・多久のことを知っていただければ幸いです。

作家童門冬二先生が「ほかにない」と称してください。この聖廟ゆかりの徳性を、今後も伸ばせるよう力を尽くし努めたいと存じます。

皆様のお力添えをお願い申し上げます。ご多幸を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

創刊号

公益財団法人
孔子の里
〒846 0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinsato.com

発行人
理事長 横尾 俊彦



第十九回

全国ふるさと漢詩コンテスト

平成二十八年十二月四日

公開講座 演題「白楽天の『新楽府』を鑑賞する」

講師 石川 忠久 先生

(公益財団法人 欺文会理事長・学校法人 二松学舎顧問)

平成二十八年十二月四日(日)、「第十九回全国ふるさと漢詩コンテスト」の表彰式が行われた。

江戸時代の邑校東原庵で学ばれていた古典や漢学に親しんでもらおうと始まったコンテストは今回で十九回目。今回は『夏』をテーマに公募され、国内344点、台湾2点の計346点の作品が集まり、石川忠久先生(二松学舎顧問)と佐藤保先生(お茶の水女子大学名誉教授)が審査され、最優秀賞に佐賀市の副島陽子さん(八十五歳)の『懐熊本城震災』が選ばれました。

副島さんの作品は、聖廟展示館敷地内に詩文を陶板に刻んだ石碑が建立され除幕式が行われました。

最優秀賞

佐賀県佐賀市 副島陽子

懐熊本城震災

熊本城震災を懐く

激震轟音瞬刻中

激震轟音瞬刻の中

忽看惨禍意窮無

忽ち看る惨禍意窮り無し

茫茫夏草斜陽下

茫茫たる夏草斜陽の下

聳立古城残像空

聳立す古城残像空し

優秀賞

童子挑西瓜

神奈川県相模原市 川上修己

大瀛淼淼接遙天

大瀛淼々々として遙天に接す

盛夏村童遊海邊

盛夏の村童海辺に遊ぶ

蓋眼憤然揮棍處

眼を蓋い憤然として棍を揮う処

綠球空在寸分先

緑球空しく寸分の先に在り

優秀賞

先妣新益展墓

福井県福井市 川口義夫

賽來埜域氣清晨

先妣の新益に展墓す

供養香華薄奠辛

賽し來たる埜域氣清き晨

今日空思風樹嘆

供養の香華薄奠辛し

撫磨墓石戒名新

今日空しく思う風樹の嘆

入選

夏日看華嚴瀑布

山形県山形市 武田昌孝

炎熱追涼百里程

夏日華嚴瀑布看る

羊腸鳥語亂山橫

炎熱涼を追う百里の程

傳聞殞命瀆潭地

羊腸鳥語亂山横たう

懸瀑聲無啼血聲

伝え聞く殞命瀆潭の地

入選

夏尋蘭若

神奈川県藤沢市 小嶋明紀子

午熱衝人古道傍

夏に蘭若を尋ぬ

獨尋野寺入閑堂

午熱人を衝く古道の傍ら

從僧識得禪機後

獨り野寺を尋ね閑堂に入る

纔覺松風吹袂涼

僧に從ひて禪機を識得して後

入選

震災後熊本夏景

熊本県熊本市 泉田辰二郎

震災火國迓南風

震災の後熊本夏景

悲慘橋居坐甌中

震災の火國南風を迓え

忍暑堪復興夏

悲慘たり橋居甌に坐すの中

荒庭尚發石榴紅

暑を忍び艱に堪う復興の夏

奨励賞

初夏偶吟

佐賀県鳥栖市 高島美津子

黄昏一望暮山青

初夏偶吟

今夜他鄉宿旅亭

黄昏一望すれば暮山青し

詩就深更千里夢

今夜他郷の旅亭に宿す

吟魂漠漠滿天星

詩就りて深更千里の夢



左から、田原優子(多久市教育長)、副島陽子(最優秀賞受賞者)、石川忠久(審査委員長)、横尾俊彦(多久市長)

未だ多久の如き者を見ず

公益財団法人鍋島報效会役員 大園 隆二郎

今年も草場佩川歿後一五〇年である。幕末佐賀を訪ねた人たちの史料を読んでいると佩川に会ったことを書き記したものが多く、有名な吉田松陰（二八三〇～五九）も嘉永三年（一八五〇）二十歳の時、佐賀城下を二度来訪し、二度目に佩川に会っている。そのときに記されたと思われる「與佩川先生（佩川先生に与う）」には漢文の学習について自分の思いを述べて教えを乞うている。佩川をはじめとする弘道館の教師たちは長州から来たこの青年を長楽庵で詩会を開いて持て成している。松陰にまだ志士の面影はない。のちに松陰門下となる久坂玄瑞（二八四〇～六四）も安政三年（一八五六）十七才の時佐賀城下に佩川を訪ねている。

遠来の仙台藩からの来訪もある。仙台藩藩校養賢堂の教師であった小野寺鳳谷（一八一〇～六六）は弘化四年（一八四七）十一月と翌年一月に多久を訪れている。澤井季山や草場船山らが歓待した。船山の日記によれば、鳳谷のために寒泉閣で詩会が催されている。鳳谷は再度の来訪の後「余天下を行く、風俗人情の醇厚なること、未だ多久の如き者を見ず。」⁽¹⁾と訪問の感概を記している。醇厚とはまごころが厚く、人情が深いことをいう。東北や江戸・京都・長崎など日本をいろいろ見て来た鳳谷の掛値のない感想であった。どんなお土産をいただくより

も、この言葉は多久に贈られた最高の賛辞であろう。再訪のときは佐賀城下で佩川に会い夜半まで親しく語ったとも書いている。

安政三年（一八五六）一月同藩の太田三峽（二八三〇～七九）が佐賀城下に来訪した。医学寮で佩川たちが詩会を開き持て成した。三峽も後に仙台藩校養賢堂の教師を務める人物である。佐賀へ来る前は昌平黌や羽倉簡堂の塾で学んでいた。羽倉塾では鶴田斗南や松本奎堂と同居していた。⁽²⁾佐賀では枝吉・木原等と城外北郊の大興寺に集まり詩を作り、小城に向い古賀利涉の竹林居を訪い、多久に赴き鶴田斗南と旧交を温めている。

佩川は安政二年に昌平黌に教授として招かれたが辞退している。先に述べたことどもと併せて、それほど世に仰がれた人であった。それは佩川自身の人格・実力に負うことは勿論であろうが、藩政時代を通じての東原庵舎の気風に培われてきたものが、草場佩川ひいては船山に結晶化していく一つの表れではなかったかとわたくしには思えるのである。

(1) 『草場船山日記』P九十五、「小野寺鳳谷の西游日録」『森銑三著作集』第十卷所収P三百七十八
 (2) 『松本奎堂』『森銑三著作集』第六卷所収P二百三十三

多久聖廟 春季積菜のご案内

日時 平成29年4月18日（火） 10時～12時10分 場所 多久聖廟

- ① 執事・佾人 入場 10時～10時20分（聖廟参道）
- ② 献官・祭官 入場 10時20分～10時30分（聖廟参道）
- ③ 積菜（せきさい） 10時30分～11時30分（聖廟内）
- ④ 積菜の舞 11時30分～11時45分（聖廟境内）
- ⑤ 参列生徒の唱歌 11時45分～11時50分（聖廟境内）
- ⑥ 揚琴の調べ 11時50分～12時（聖廟境内）
- ⑦ 孔子の里腰鼓 12時～12時10分（仰高門前）
お呈茶 10時～14時（東原庵舎）

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承ください。

「婆心帖」の傍らから — 鶴山書院によせて —

尾形 恵子

昨年八月から月に一度東原座舎に設けられた「婆心帖をよむ」という講座を担当させていただいている。「婆心帖」というのは佐賀藩校弘道館に出仕するようになった草場佩川が、当時の学制改革によって新たに設けられた小学、つまり一般庶民向けの教導所で行った授業を、教え子の求めに応じてまとめたものである。仮名を主体とした本文にさまざまな挿絵が施され、昔からの言い伝えや習わしの由来を説き、物事の道理を悟らせようとする徳育書である。その説明には俗説も多く交えられていて、読み解くには当時の世情ともいべきものの理解が不可欠である。解釈は手探りで時として判じ絵のような挿絵から謎が解けることもあり、甚だ心もとないありさまだが、人の知見の目が開く、それがどうゆうことなのかを噛んで含ませるように言い聞かせる教育者佩川の姿が見えてくるような気がしている。婆心というのは老婆が子を慈しむように、繰り返し繰り返し教え導く導師の心である。熱心な皆さまに支えられて本年度も読み解きを続けていくことになった。草場佩川という人物の足跡の一步なりとでも手繰り寄せることができれば幸いだと思っている。

この草場佩川が世に出るきっかけとなったのは、言うまでもなく文化七年（一八一〇）古賀精里に従って赴いた対馬での朝鮮通信使との会見である。無事接待を終えた古賀精里一行は呼子から佐賀へ戻り解散するのだが、実は多久で東原座舎に一泊している。「珮川詩鈔」には東原座舎にまつわる詩が数点あり、

その呼称は邑庠、学寮などであるが、この対馬からの帰りに賦された詩には「鶴山書院」と記され「多久邑庠」と但し書きが付けられているのが何故か印象に残っていた。「我師宿ス鶴山書院」という題の始まりには佩川の万感の思いが込められているのではないだろうか。この機会にその詩を紹介させていただくことにしたい。

我師宿_ニ鶴山書院_一 丹邱邑庠
 接伴人私_ノ溜川_一 請_レ觀_ニ韓客贈答文詩
 余亦有_二出_示_一 時適星夕也

我が師が鶴山書院に宿した（多久邑庠） 接伴人の樋口溜川（しせん・後の高津溜川）と私は師に請うて韓客との贈答の詩を見せて貰った。私も詩を差し出したあの時 あたかも星は輝いていたのだが

「海上星移」擲_椽 帰舟漫自擬_ニ張槎_一
 咲余無用_ノ支機石 輪那奪_ニ将錦似_一「レ霞」
 海上星移一擲ノ椽（ヒ） 帰舟漫（ヨロツ）
 張槎（チヨウサ）ニ擬エルヨリ 咲（ワラウ）
 余無用_ノ支機石
 輪（マク）ル那ノマサニ錦ノ霞ニ似ルヲ奪スルニ

古代の中国説話に「張槎」という筏が出てくる。昔天の川は海に通じているとされ、ある男が「張槎」に乗って一瞬にして天上界にたどり着いた。やがて

男は天上の織女から機織の支えに使う石を貰って再び「張槎」に乗って下界へ帰って来る。「椽」というのは機織の部品で横糸を通す道具のこと。「那」は強調語である。

対馬でのひとときはあたかも詩文をあやなす織機の支石を貰ったような夢見心地で過ぎて、たちまちのうちに鶴山書院へ帰ってしまった。我に返ってみれば天上の錦は霞のように巻き取られ、どうやら飾るいとまもなさそうである。大役を終えた安堵感に浪漫と詩情が交錯する。高揚さめやらぬ心を、尊敬する石井鶴山の名を冠する書院の名称でさりげなく律してみせた、草場佩川二十五歳の時の詩である。

（草場佩川の会 副会長）

公益財団法人 孔子の里 販売物

◇論語 日めくりこよみ 700円



◇百人一首式論語カルタ 2,500円



問い合わせ先 公益財団法人 孔子の里 電話 0952-75-5112

当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。

Q 百人一首式論語カルタ 検索

肥前国多久邑八景詩紹介 (其の一)

江戸幕府の教学の中心をなしたのは、林羅山を初代とする林家である。慶長十二年（1607）に羅山が徳川家康に登用され、諸法度の起草や外交文書の起草を行っていた。その忍岡の家塾は、幕府の学問的役割を担い、儒学・漢学隆興の礎を築いた。二代鷲峯も治部卿法印、弘文学院学士として、その役割を継承し、三代の鳳岡は、元禄四年（1691）に上野忍岡より湯島昌平坂に移り、湯島聖堂が竣工すると、將軍綱吉の命により、大学頭に任ぜられ湯島を文教の府となしている。

その鳳岡（林信篤）が正徳五年（1715）に多久家に送った『肥前国多久邑文廟記』「正徳五年乙未五月丁日 従五位下大学頭 藤原朝臣信篤謹識」と、鳳岡の長男で後に四代林大学頭となる林信充の『肥前国多久邑八景並序』「正徳五年乙未仲夏 諸官快堂林信充士僮甫題」林信智の『肥前多久八景詩』「経筵講官 林信智 艸」が遺されている。

正徳五年（1715）の多久は、元禄十二年（1699）に東原庵舎（鶴山書院）を創設し、宝永五年（1708）に多久聖廟（恭安殿）を創建した四代領主多久茂文は正徳元年（1711）43歳で没し、五代茂村は正徳四年（1714）小城藩を相続し鍋島直英となつて多久を去り、六代多久茂明の世となり、茂文の偉業を継承していた。

今、多久に幕府儒官林信充の多久邑八景の漢詩が刻まれた石碑が点在している。今から三百余年前の多久の風景を思い巡らしながら散策してみよう。（服部）

肥前国多久邑八景並序

古云境者以有景而彰

然無其人則不能彰其美也

肥前候之家長多久茂明其郡内之境

景象萬千曠其盈視盱其駭囑

嘗掄其萃者以表其景

且欲請詩什而題面目

余欲入其境則萬千里之波濤

一葦以難航之欲觀其景

則數百程之駟路一鞭而難駕之

乃綴鄙語以塞所需

各七言其八首蓋是亦孫綽賦天台

朱放詠沃州之類乎

古に云ふ、境は景有るを以て彰はると。

然れども其の人無くんば則ち其の美を彰はす能はず也。

肥前候の家長多久茂明、其の郡内の境、

景象萬千、其の盈視を曠くし、其の駭囑を盱にす。

嘗て其の萃者を掄び、以て其の景を表し、

且つ詩什を請うて面目に題せんと欲す。

余、其の境に入らんと欲すれども、則ち方千里の波濤、

一葦を以て之に航し難し。其の景を觀んと欲すれども、

即ち數百程の駟路、一鞭にして之に駕し難し。

乃ち鄙語を綴り以て需むる所を塞ぐ。

各七言、其の八首。蓋し是を亦孫綽の天台を賦し、

朱放の沃州を詠ふの類か。

其の一

文廟杏花

幾樹杏花交影明

廟前廟後報春晴

紅音似奏遏雲曲

和答絃歌壇上聲

幾樹の杏花交はりて影明らかなり
 廟前廟後春晴を報ず
 紅音は遏雲曲を奏するに似て
 和して答う絃歌壇上の声



《儒林》

多久では先覚者・先賢を儒林と呼んでいる

多久顔楽齋安成 (一六四八〜一七三七年)

江戸時代、文化年間から弘化年間に多久の儒者深江順房により編纂された『丹邱邑誌』に「多久顔楽齋 又顔楽堂、姓藤原、諱安成、自称李之允、後造酒、父茂旨、母鍋島氏、天叟府君ノ曾孫、□堂トモ云、君家ノ親族也、儒術アルヲ以テ、雄山府君信任セラル、著「敬物要語」一篇、又「儒学要語」トモ云、猷スルヲ又国君ニ聞セラル、惜哉其書今伝ハラズ、元文二年丁巳九月十八日没、寿九十、浮屠諡無生軒了源實徹居士、横山村大梅寺ニ葬ル」との記載がある。

多久初代邑主多久安順は、竜造寺長信の嫡子で水江竜造寺五世与兵衛尉家久と名乗っていたが、佐賀鍋島藩が確立すると、慶長十三年(一六〇八)に竜造寺姓を遠慮して多久長門守安順と改姓している。安順の正室千鶴(徳寿院)は、佐賀藩祖鍋島直茂の娘で、初代藩主鍋島勝茂の姉である。千鶴には子が無く安順の妹(武雄邑主後藤晴明に嫁ぐ)、の次男茂富を養子とし、茂富の嫡男茂辰に藩主勝茂の二女鶴姫を妻として迎え多久家の家督を相続させている。安順には、側室の長庶子茂順がいたが藩主鍋島家や正室千鶴への配慮があったものと思われる。

二代多久邑主となった茂辰は、実妹を茂順の嫡子茂旨に嫁がせて多久家の家老に取り立てている。その茂旨の嫡子が安成である。

安成は、正保五年(一六四八)二月八日に生まれ、通称李之允、顔楽齋と号した。多久家の親族家老として、横山村(現在の南多久町駄路、堂の原、向の原、井上、東雨ヶ瀬、西雨ヶ瀬)二百四十石を采地(知行地)とし、領民からは横山様と親しまれた。邸は横山屋敷と呼ばれ八幡小路の西側、現在の東原庵舎西溪校の所に在った。儒学に優れ、四代邑主茂文の信任が篤く、邑校東原庵舎及び聖廟の創建に優れた功績を遺している。また、『敬物要語』(儒学要語)を著し、邑主茂文に献じた。これは鍋島家の『葉隠』にも匹敵する多久家の精神書と評価されるほど優れた著書であったと伝えられるが現存しない。『丹邱邑誌』が編纂された江戸時代の後半にはすでに紛失していたらしく、「惜しむらくか其の書今に伝わらず」と著者深江順房は記している。

元文二年(一七三七)九月十八日に八十九歳で亡くなり、南多久町横山の仙桂山大梅寺に一族の墓と共に葬られている。戒名は無生軒了源實徹居士。(服部政昭)

【参考文献】「多久市史第二巻」(二〇〇二)

「多久の歴史資料編」(一九六四)

「丹邱邑誌巻一」(多久市郷土資料館所蔵)



私の好きな論語



多久市立東原庵舎西溪校6年生 藤田 真央さん

「図らざりき樂を為すこと斯に至らんとは」

これが私の一番好きな論語です。私なげこのろん語がすきかという、小さいころに音楽がきれいだとは思いませんでした。でも今は音楽がこんなによいものだとしつて、もつともつと音楽のことがしりたいです。ピアノをもつと楽しみたいです。



多久市立東原庵舎西溪校5年生 山北 美来さん

「己の欲せざる所は人に施すこと勿れ」

私は、心優しい人になりたいと思っています。良い事をする、良い事がかえってくる。でも悪い事をする、悪い事がかえってくる。そんな言葉を信じて、毎日をすごしています。私は将来何の仕事についても、心優しく、相手の事を考えて毎日をもつとしたいです。

たく市民大学

たく市民大学「ゆい工房」は生涯学習の一環として伝統文化の継承や生涯健康を目的として、「岸川まんじゅうづくり」「田舎コンニャクづくり」「健美体操&フットセラピー」ろはすば式（こちよい心と体のケア）「ヨガ教室」他を開催しています。また本年度からは、「鶴山塾」と題し、邑校東原

座舎（鶴山書院）で学ばれていた論語や漢学など、学問・教育に光をあてた講座を設けました。

【古文書入門講座】

講師・片倉日龍雄（多久古文書の村民）

【論語講座】

講師・武田耕一（公益財団法人孔子の里理事）

【婆心帖をよむ】

講師・尾形恵子（草場佩川の会副会長）

【多久の歴史と文化を学ぶ講座】

三浦尚司（福岡県漢詩連盟会長）、大園隆二郎（公益財団法人鍋島報効会役員）、尾崎葉子（有田町歴史民俗資料館館長）、古川英文（佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長）、富田紘次（公益財団法人鍋島報効会徴古館主任学芸員）、西村隆司（多久市郷土資料館館長）を講師に迎えて多久の歴史と先覚者について学びます。

詳細は、公益財団法人孔子の里「たく市民大学」係へ、お問い合わせされるか、ホームページをご参照下さい。

（亀川）



第二十二回 多久市論語カルタ大会入賞者

【幼稚園・保育園の部】

- ・優勝 村川 虎太郎（こぼと保育園）
- ・準優勝 浦川 みなみ（こぼと保育園）
- ・三位 藤瀬 虎之助（こぼと保育園）

【小学一年生の部】

- ・優勝 梶原 好聖（西溪小）
- ・準優勝 吉田 凜音（中央小）
- ・三位 若林 星汰（中央小）

【小学二年生の部】

- ・優勝 溝口 祥生（中央小）
- ・準優勝 徳重 瓢（東部小）
- ・三位 武富 心咲（中央小）

【小学三年生の部】

- ・優勝 広橋 華恵（東部小）
- ・準優勝 高柳 旬（西溪小）
- ・三位 北島 薫（東部小）

【小学四年生の部】

- ・優勝 永田 夕佳（西溪小）
- ・準優勝 田代 渚咲（東部小）
- ・三位 上瀧 由佳（東部小）

【小学五年生の部】

- ・優勝 荒島 陽菜（東部小）
- ・準優勝 徳重 こと李（東部小）
- ・三位 中島 遙音（東部小）

【小学六年生の部】

- ・優勝 山本 真愛（西溪小）
- ・準優勝 堤 彩花（西溪小）
- ・三位 溝口 滉歩（中央小）

【中学生の部】

- ・優勝 山田 大智（武雄青陵中）
- ・準優勝 田島 廉太（西溪中）
- ・三位 溝口 素世（中央中）

【高校・一般の部】

- ・優勝 今福 優奈（致遠館高校）
- ・準優勝 中島 孝星（太良高校）
- ・三位 梶原 秀（北陵高校）

第1回 多久百景写真コンテストのご案内

あなたの写真が多久百景に！

（毎年二十景・5年間で百景を認定します）

- テーマ 多久の四季・伝統文化・歴史
- 応募期間 2017年5月1日～7月31日
- 応募料 無料
- 応募条件 多久市内で撮られた写真に限定

詳しくは当財団HPをご覧ください。下記へお問い合わせ下さい。

問い合わせ先 公益財団法人 孔子の里
「多久百景 写真コンテスト」係
電話 0952-75-5112

孔子の里 検索

来訪・来信・雑識

- 4月7日 多久聖廟春季積菜委員会
- 4月18日 平成二十八年年度多久聖廟春季積菜
- 4月28日 公益財団法人孔子の里監査
- 5月6日 公益財団法人孔子の里評議員選定委員会
- 5月9日 公益財団法人孔子の里評議員会
- 5月30日 公益財団法人孔子の里評議員会
- 6月2日 広島県論語の会 伊藤智子様・川崎芳枝様来廟
- 6月14日 福岡県漢詩連盟 三浦尚司様来廟、来舎
- 6月20日 西松浦郡有田町 同朋保育園園児 聖廟で素読
- 6月20日 公益財団法人 モラロジー研究所理事長 廣池幹堂様ご夫妻来廟
- 6月22日 公益財団法人孔子の里理事会
- 7月13日 諸田賢順を偲ぶ会
- 8月7日 草場佩川先生墓清掃
- 8月23日 東原座舎防火訓練
- 8月30日 山口県秋博物館学芸員平岡崇様来舎 (旧萩警察明倫館のオープン展示資料の調査)
- 9月14日 通学合宿
- 9月19日 大阪府四条暖神社 先哲祭に参列
- 9月23日 多久聖廟秋季積菜委員会
- 10月4日 福岡県立修猷館高等学校「母の会」来廟
- 10月8日 多久聖廟周辺合同美化活動
- 10月10日 多久家十三代多久皓一郎夫人 多久茂美様来廟
- 10月22日 23日
- 中華新聞社・時代旬礼(深圳)文化伝播公司一行来廟、来舎(中国、香港、台湾、韓国、日本における孔子行事の取材・撮影)
- 10月23日 平成二十八年年度多久聖廟秋季積菜
- 10月27日 多久市文化財審議会
- 10月28日 11月1日
- 趙勇と行く「西安・北京の旅」
(孔徳謙女士の百寿祝いをかねて)
- 11月10日 西松浦郡有田町 同朋保育園園児 聖廟で素読
- 11月13日 高取伊好曾孫 高取ヒデアキ様来廟
- 11月20日 J Rウォーキング来廟
- 11月23日 多久聖廟一般公開
- 11月20日 論語カルタ大会(東原座舎東部校にて)
- 12月4日 第19回全国ふるさと漢詩コンテスト
- 12月4日 二松学舎大学教授 町泉寿郎様来舎
- (一松学舎創立百三島中洲と多久の需林との関連調査)
- 12月26日 市内中学校生徒会交流会
- 1月4日 新年の集い賀詞交換会
- 1月9日 合格祈願絵馬奉納式
- 1月28日 日本自動車ア株式会社社長 吉原利美様来廟
- 2月5日 大韓民国安東市陶山書院六名来舎
(韓国の伝統儒教施設である書院と日本の教育施設の比較研究)

賛助会員入会の案内

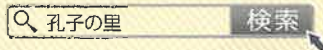
本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。
ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

・会員の種類

- 個人賛助会員 年会費 一口 3,000円
- 法人賛助会員 年会費 一口 10,000円

・入会申込み・お問い合わせ

〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原座舎内
公益財団法人 孔子の里 事務局
電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
詳細は当財団ホームページをご覧ください。



- 2月7日 立命館大学史資料センター調査研究員 長谷川澄夫様
来廟(立命館創始者中川小十郎の恩師多久需林田上緯
後の調査研究)
- 2月8日 中華人民共和国対外経済貿易大学准教授 呉丹紅様
来舎(孔子の教えが現在の日本に与えている影響の調
査研究)
- 2月9日 早稲田大学国際部留学センター教授 ワット ボール様、
来廟 同 客員教授マイケル シュナイダー様来廟
- 2月13日 合格祈願絵馬奉納式
- 2月13日 3月31日 熊本震災被害による多久聖廟改修工事
文化庁文化財管理指導官 武内正和様来廟
(多久聖廟改修工事指導の為)
- 2月16日 多久市文化財審議会
- 2月28日 合格祈願絵馬奉納式
- 3月1日 公益財団法人孔子の里理事会
- 3月1日 福岡工業大学地域連携共生学習講座「多久の地で論語を学ぶ」
- 3月12日 福岡工業大学社会学部教授 上寺康司様来舎
- 3月12日 九州大学 九州大学文学部中国文学研究室
静永健教授ゼミナール合宿
- 3月22日 公益財団法人孔子の里評議員会

編集後記

四十年振りの故里です。
郷土の偉大な歌人安藤寛先生の「郷土の山の容を涙して身に仰ぐなり帰りに来たりぬ」「目にあるものすべてが沁むごとく故里に帰り知らぬ人多し」の心境です。
三百年前に学問所を設け、邑民教育を連綿と続けて来た郷土の先人達と風土を今にいかし、未来に向けての歩みを一歩一歩すすめて行けたらと願っています。
皆様のご指導ご協力を宜しくお願い致します。

聖廟の森では鶯の囀りが春を告げ、時折、「チヨットコイ、チヨットコイ」と小綬鶏のけたたましい鳴き声が響き渡ります。書院の庭には馬酔木の花が満開です。お出掛け下さい。(服)

